

〔論 文〕

中等教育及び高等教育における絵画指導についての一考察 —日本画に対する学生の認識—

A Study of the Teaching Method of Art Painting in Secondary Education and Higher Education
—Students' Recognition to Japanese Style Painting—

永 井 学
Nagai Manabu

〔要旨〕

本研究を通して、学生の日本画に対する意識や認識と中等教育美術科（中学校美術科及び高等学校芸術科美術）における日本画に関する学習活動経験の実態をアンケート調査によって明らかにすることで、中等教育美術科及び高等教育での絵画指導、特に日本画分野における学習指導上の一課題について検討し、次の結論（成果及び課題）を得た。

1. 高校生の79.2%が日本画と洋画（西洋画）の区別ができると認識している。
2. 高校生の60.6%は美術の授業で日本画に関する鑑賞活動の経験・記憶がない。
3. 高校生の80.8%は美術の授業で日本画に関する表現活動の経験・記憶がない。
4. 日本画に対する認識があると回答した高校生の26.5%以上は、明治期日本画形成以前の日本絵画を日本画として認識している。
5. 学生に、日本画を正しく認識するための学習（表現・鑑賞活動）が必要である。

1 はじめに：研究の背景と動機，研究の目的と方法

(1) 研究の背景と動機

各地域や各国々の文化は、それぞれの歴史や風土の中で培われてきた人々の行動様式やそこに暮らす人々の価値観の表出である。また、美術文化は、その地域や国の文化の重要な構成要素であり、歴史や風土、その地に暮らしてきた人々の価値観が現われたものであるということも疑う余地がない。矢代幸雄は、「自然の形態と色彩と明暗とが人間の感覚を動かし、心に映じて心象となり、是が或は立體的に或は平面的に寫されて、美術となる。然るに人間の心も自然の相も、その原則に於て世界に共通するが故に、兩者の相關より生るゝ美術も、その本質並びに原則に於て世界に共通する人類の現象たるは、當然である。……然るに同時に美術の表現は民族的、國民的である。……人間生活を取圍む雲煙、山川、草木の風趣は、各地に於て異ならざるを得ない。それ故に、本質の世界性は民族的乃至國民的表現によりて具象化されて、美術となり得るのである」¹⁾と論じ、美術の本質が人間に共通して普遍的な世界性と民族性にあるとしている。つまり、それぞれの地域や国の美術文化を知ることは、それぞれの地域や国の風土や歴史、文化、人々の暮らしや行動様式、人々の価値観、その地域や国の美術表現上の素材や技法などを知ることでもある。

国際化・グローバル化が加速的に進む今日、現代社会を生き抜いていくためには、よりよい国際理解と国際協調が求められる。国際理解や国際協調の基本は、他国の個々人のことを知ろうとすることはもとより、他国の歴史や風土、文化、他国の人々の暮らしや行動様式、価値観などを知ろうとすることから始まる。と同時に、自国についての理解を深めていくことが求められる。自国の歴史や風土、文化、自身の暮らしや行動様式、価値観の理解なくして、よりよい国際理解や国際協調はないと言っても過言ではないが、国際理解や国際協調が声高に叫ばれる中、普通教育・全人教育である中等教育美術科の授業において、自国の美術文化についての学習活動が十分に行われているのであろうか。

有田洋子は、飛鳥時代から昭和時代までの日本美術史上重要と有田が考える美術作品70点（絵画43作品、彫刻22作品、工芸5作品）を作品の制作年代順に選定し、大学生57人を対象に、代表的な日本美術作品をどの程度見知っているかというアンケート調査を行っている。この調査の分析・考察により、有田は、「1.大学生の半数以上がはっきり見たことがあるとしたのは代表的な日本美術70作品中25作品であった。2.大学生は見知った作品の75%は学校で見たと回答した。日本美術作品を見知る主な場・機会は学校であった。3.大学生は学校で見知った作品のうち79%は社会科で見たと回答した。学校教育のなかでも社会科が日本美術作品を見知る主な場・機会であった。4.社会科の学習指導要領は美術を含めて文化・伝統を重視していた。教科書で代表的な日本美術作品は、多くが歴史資料、説明図・挿絵として扱われていたが、なかには図画工作・美術科的な内容もあった。5.社会科の学習では知識理解は増えても、美的感受を軸とする美術的教養は磨かれない。図画工作・美術科でそのような美術的教養は育てられるべきである」²⁾と結論づけている。有田は、代表的な日本美術作品をどの程度見知っているのか、また、どのような場・機会に見知ったのかという視点から、絵画、彫刻、工芸の三分野を網羅する70点という多くの作品を具体的に学生に提示し、学生の小学校・中学校・高等学校での日本美術の学習実態を明らかにした。日本美術作品に対する知識の約8割は社会科の学習活動で得ているという実態から、小学校図画工作科や中学校美術科、高等学校芸術科美術での授業において、日本美術に関する美的な教養を養い育てるための学習の必要性について言及した有田の問題提起が興味深い。

本論筆者は、日本画制作研究を専門領域としている。前論では、中等教育及び高等教育での絵画指導について、学生の絵画に対する意識や認識に関する調査結果を基に、「……絵画とデザインとの表現上の特性や違いについての意識や認識が無い子供が、高等学校芸術科『美術Ⅰ』で学んでいる高等学校1年次生のおよそ4割余りも存在するという実態……」³⁾を明らかにし、絵画指導上の一課題が絵画の特性について認識を深めるための授業実践にあると論じた。この課題は、日本画分野においても同様である。また、若い画学生の日本画に対する意識や認識と、市民公開講座（筆者が勤務する短期大学でのオープンカレッジ「日本画体験講座」や「美術科フリーアカデミー」）で学ぶ初老の受講者の日本画に対する意識や認識との間に年齢による差がなく、「日本画=大和絵や浮世絵など、明治期日本画形成以前の日本絵画」という認識が強くあり、「現代絵画としての日本画」という認識には至っていないということに対する筆者の危機感が本研究を行う動機となった。

(2) 研究の目的と方法

ア 研究の目的

本論では、中等教育（中学校・高等学校での美術の授業）及び高等教育での日本画分野における絵画指導に限定し、日本画分野における学習指導の現状と課題について考察する。

具体的には、高等学校や大学において美術やデザインに関する科目・講座を選択し学ぶ学生の日本画に対する意識や認識、学習活動の経験を調べるアンケート調査を実施し、その調査結果を分析することで、絵画指導、とりわけ日本画分野における指導上の課題を明確にする。学生の日本画に関する学習経験と学習の度合い（日本画に対する意識や認識）に焦点を当て、調査・分析を通して、中等教育との連続性・系統性のある高等教育での授業実践につながる基礎研究とすることを本研究の目的とする。

イ 研究の方法

本研究は、次に示す方法により進めていくこととする。

- ①日本画の定義についての考察。
- ②中学校美術及び高等学校芸術「美術Ⅰ」における文部科学省検定教科書掲載図版についての調査、及び「中学校学習指導要領 美術」、「高等学校学習指導要領 美術（美術Ⅰ）」における日本画を含む日本絵画に関する学習指導の位置付けについての考察。
- ③高校生及び大学生へのアンケート調査の実施と調査結果を基にした日本画に対する意識や認識、日本画に関する学習活動の経験についての考察。
- ④本研究のまとめ（本研究の成果及び今後の課題）。

2 日本画の定義

近代及び現代の日本絵画を大きく二つに分類するとすれば、「洋画（西洋画）」と「日本画」に分けることができよう。絵画における世界的潮流である多様化の渦中であって、今日の日本絵画においても多様化が進み、洋画（西洋画）作品と日本画作品との境界が曖昧になるに至って久しい。本章では、改めて近代及び現代の日本絵画を洋画（西洋画）とともに二分してきた日本画の定義について考察し明確化することで、学生の日本画に対する意識や認識について、また、中等教育及び高等教育での日本画分野における絵画指導の現状と課題について論ずる基底としたい。

まず、日本画と対を成す洋画（西洋画）についての定義であるが、『広辞苑』（第七版第一刷）では、「せい・よう・が グ【西洋画】 西洋において発達・普及した材料・技法によって描いた絵画。テンペラ・油絵・水彩画・パステル画・鉛筆画・ペン画の類。日本には一六世紀後半キリスト教とともに伝えられ、一八世紀からは長崎のオランダ人を通じ銅版画法や遠近法が採り入れられ、明治以後日本絵画の主流となった。洋画⁴⁾とある。また、『世界大百科事典』（29 改訂新版）によると、「ようが 洋画 西洋絵画、西洋画の略。欧米の絵画全般と、桃山時代以降に日本で西洋風の材質、表現法を用いて制作された絵画とをいうが、後者の場合に明治期以前のを特に洋風画とよんで区別する。一般に洋画とは、日本の明治期以後の主として油彩画を指している。洋画の概説については、〈明治・大正時代美術〉の項を参照されたい⁵⁾とある。つまり、日本絵画における洋画（西洋画）とは、明治期以後の主として油彩画など西洋において発達・普及した材料・技

法によって描いた絵画のことである。

一方、日本画の定義について、『広辞苑』（第四版第一刷）によると、「にほん・が『日本画』 明治以後にヨーロッパから入った西洋画に対し、わが国在来の技法・様式による絵画。墨や岩絵具を主として、若干の有機色料を併せ用い、絹・紙などに毛筆で描く」⁶⁾とある。また、『ブリタニカ国際大百科事典』（第2版改訂）によると、「日本画（にほんが） 日本古来の伝統的表現様式に基づく絵画。明治時代に西洋画の摂取が盛んになると、狩野派、土佐派、円山四条派、南画派など江戸時代以来の伝統的表現様式に基づく絵画を西洋画と区別する必要が生じ、それらを一括して日本画と呼んだ」⁷⁾とある。さらに、『世界大百科事典』（21改訂新版）では、「にほんが 日本画 古く中国から伝えられ、長い歴史の中で形成された絵画。膠^{にかわ}を接着材として天然産の色料（近代以降、人造色料も現れた）や墨を用いて表現される。明治以後、西洋伝来の油絵具を使う油絵（洋画）と区別して、これに対して用いられた言葉である。しかし現在、日本画は大きく変わりつつあり、新しい表現技術の採用などによって洋画との区別はつけにくくなってきている。にもかかわらず、日展でも日本画と洋画は科を異にしているし、院展（▶日本美術院展覧会）のように日本画だけの展覧会もあり、社会通念としてははっきりと区別されている。それゆえ日本画と洋画を分けて説明するには、＜材料＞と＜技法＞を中心に考えてみるのがよい。日本画の歴史と状況については、＜明治・大正時代美術＞および＜日本美術＞の項目を参照されたい」⁸⁾とある。そして、『新訂 マイペディア小百科事典』（初版第1刷）においては、「日本画^{にほんが} 明治以降西洋から輸入された油絵（洋画）に対して作られた語で、日本古来の技法・様式による絵をいう。岩絵具や水絵具を膠^{にかわ}水でといて絹地や紙に描く。院展等のように日本画だけの展覧会もあり、日展でも日本画と洋画の区別があるが、材料・技法等複雑多様になっている現代美術においては明確な区別がつけにくくなってきている」⁹⁾と記載されている。

つまり、近代及び現代の日本絵画を実質上二分してきた洋画（西洋画）と日本画という分類は、明治期の日本画形成以降に作られた分類であることが分かる。『図解 日本画用語事典』（初版第5刷）には、日本画について、「日本画という言葉は明治時代に西洋画に対してつくられた言葉である。日本画の概念には伝統的な日本の絵画を総称する意味と、伝統的な日本の絵画技法を継承しつつも西洋画法を取り入れた新様式の絵画を総称する意味とがある。……今日においては日本画という言葉は特定の絵画様式を指すものではなく、主に板、麻、絹、紙などの基底材に筆を使用し、墨を用い、顔料を膠で接着させて描く絵画と、広く解釈される場合が多い」¹⁰⁾とある。

日本画について、北澤憲昭は、「『日本画』は、明治期に創出された近代の絵画である。江戸時代までに形成された絵画伝統を踏まえてはいるものの、その自然な発展として形成されたものではない。幕藩体制から明治の中央集権体制への政治的転換に即して創り出された新しい絵画、それが『日本画』であった。……『日本画』は、長いあいだ、伝統絵画の異名として用いられてきたが、その起源は、実は近代に見出されるのである」¹¹⁾とし、「現在のいわゆる『日本画』の概念は、……明治以後に形成されたと考えられる。『日本画』という文字は、江戸時代にもたとえば吉田柳蹊宛の椿椿山の書簡に『日本画皆写生なり』というように用いられているものの、この場合の『日本画』は『倭絵』『大和絵』『和画』『日本絵』などという同義語のなかの一つにすぎなかったとみるべきだろう。また、

読み方も『にほんが』ではなく、おそらく『やまとゑ』であったにちがいない。それは日本絵画というほどの意味であり、現在のいわゆる『日本画』と同意の語ではなかったのだ。この語が、『日本』国を代表する絵画という現在のよな意味を胚胎することになったのは、思うに明治十五年（一八八二）の『美術真説』でこの語が使用されてからのちのことに属するのである。……『日本画』という語が想起させるのは、なによりもまず膠彩画の粒子きらめく明澄な画面であるはずであり、しかも、それは日本の伝統絵画のすべてを覆うものではないのである。もちろん、膠彩画が日本絵画の伝統において重要な存在であり続けてきたことは否定しようがないものの、では明治以前の膠彩画と明治以後のそれが同じものかといえば、それらが呼び起こすイメージのあいだには決定的な違いがあるといわねばならない¹²⁾と論じている。北澤は、近代日本画の形成過程についての研究を基に、古来より長く続く伝統的な日本絵画が日本画であるという認識は間違った認識であり、日本画は明治期1880年代以降に作り出された新しい絵画であると論じた。また、北澤は、エドゥアール・グリッサンが提唱した「クレオール化」という概念を、明治期の日本画形成過程と重ね合わせ考察し、「……『日本画』と呼ばれる絵画は、クレオール性が著しい。幕末の日本社会に行われていた絵画を“基層言語、”とし、西洋画法を“上層言語、”として受け入れることで『日本画』は成り立ったからである。それは、絵画上の混成語－接触言語としてスタートしたのであった。……先に基層言語にたとえた幕末期の画法は、中国絵画の強大な影響下に形成されたクレオールだったのである¹³⁾」と論じている。北澤は、この「クレオール化」の概念について、「クレオール化は、複数の文化、あるいは、少なくとも複数の異なった文化の要素の総和ないしは総合からはまったく予測できなかったような、新しい与件を産出することである。『クレオール』という語は、ご存じのように、いくつかの意味を持ちますが、言語に関しては、植民地^{ママ}において宗主国と現地の言語が混成した言語のことを指します。グリッサンは、これを一挙に文化概念として押し広げてみせたわけであり、このようなクレオール化は、現在、さまざまな学問の分野においても見出されます¹⁴⁾」と述べている。この「まったく新しい与件の産出」が「日本画」であるというのだ。

古田亮は、北澤の「クレオール絵画としての日本画」という論を踏まえ、「……日本画とは何かを考えた時に、そもそも中国からの強い影響によって、古代から変化を遂げながら現象してきた近世までの日本絵画は、中国絵画に対するクレオール絵画であったとすることができる。……そして、十九世紀後半、近世＝西洋化という開花の波の中で、西洋絵画の圧倒的な影響を受けた日本絵画は、日本画と洋画という二つのクレオール絵画を生み出した……¹⁵⁾」とし、「……近代日本画とは、伝統日本絵画が西洋絵画の受容によってクレオール化した絵画であると定義することもできる¹⁶⁾」と論じるとともに、「……本書の立場は、日本画を、歴史と様式という二つの視点から捉えようとするものである。歴史的視点とはつまり、近代以降に新たに生成し展開した日本絵画の総称を日本画と呼ぼうという解釈である。実際のところ、美術史学の分野ではこの解釈をスタンダードと位置づけており、明治期から戦前までの時期であれば近代日本画、戦後以降は戦後日本画、あるいは現代日本画とさらに歴史的な差異化を試みる。この歴史的視点には、常に様式史の視点が重なり合っている。……これを英訳すれば、ジャパニーズ・スタイル・ペインティング（Japanese style painting）となる。これは、今日、日本画の英訳としては比較的よく用いられている英訳であって、新しい日本画の解釈というわけではない¹⁷⁾」としている。

北澤や古田は、日本画を歴史的視点と様式的視点の二つの視点から捉え、日本画は明治期の日本画形成までの伝統的な日本絵画とは異なる絵画であると論じた。さらに、小野文子と間島秀徳はその共同研究において、「日本近代の美術の変化は、まさに西洋美術への対応と共にあったのである。日本は西洋を摂取し、日本の伝統と『折衷』することで、『新しい日本』を創出したのである。このことは、近代美術においては、アーネスト・フェノロサや岡倉天心らの新しい『日本画』創出の活動に顕著に表われている。『日本画』は、伝統を正当に継承したかのように見せつつ、西洋絵画の価値観を取り入れたという意味では、新しい絵画と言えるだろう」¹⁸⁾と論じている。つまり、明治期の近代化過程の中で新たに生み出された日本画は、中国絵画の影響を受けながら独自に展開してきた伝統的な日本絵画の様式と西洋近代絵画の理論や価値観、画法という西洋絵画の様式とが融合したという点において、日本と西洋の二つの特徴が絵画様式上融合した絵画であると言える。

筆者は、本論「研究の背景と動機」において、美術文化は、それぞれの地域や国の文化の重要な構成要素であり、その歴史や風土、その地に暮らす人々の価値観の現われであると述べた。この意味において日本画も、日本の歴史や風土、日本人の価値観が現われた絵画であると言える。中村二柄は講演の中で、純粹美術である絵画・彫刻の特質について、「……絵画・彫刻の世界は自由であるというが、この世界も、さまざまな制約にみちているといえる。素材・技術・主題・モチーフ、すべて制約であろう。作者の創作活動を限定していく大きな制約であろう。しかし一般には、自由な制作活動というのはここから始まる、という考えが普通である。即ち、あらゆるものは本質的に制約の中に存在する。これが単なる制約を超えて自由の翔たく原動力になることこそ、芸術といわれる世界に他ならない」¹⁹⁾と語っている。つまり、日本絵画の一分野である日本画にも当然ながら、使用する絵具や支持体（素材）・技法（技術）・表現テーマ（主題）・表現の対象または動因（モチーフ）など表現する上での制約が少なからずあり、否応なく、日本の歴史や風土、日本人の価値観が表現様式上の特徴（特質）として現われる。現代の日本絵画としての日本画の表現が、作者の意識・無意識に関わらず日本の歴史や風土、日本人の価値観が現われた表現となることも、必然の理であろう。要するに、日本画は、作者個々人の価値観により、日本画形成以前の伝統的な日本絵画の要素・様式と西洋近代絵画の思想や絵画様式とが、さまざまな段階・度合いで混交・融合、調和・合力することで作り出された絵画であり、総じて日本の歴史や風土、日本人の価値観が現われた絵画であるということだ。多種多様な日本画表現の一要因がこうした日本画形成過程そのものにあると言えよう。

北澤や古田ら近年の日本画に関する研究成果により、2010年代には日本画の定義が捉え直され、今日では日本画は近代（明治期）以降に新たに生み出された日本絵画の一様式であると定義されている。先に挙げた『図解 日本画用語事典』（初版第5刷）は2011年3月10日発行であり、こうした日本画形成に関する研究成果を反映し、今日の日本画の定義が一般的理解になりつつある時期に発行されたと捉えることができる。そして、2018年1月12日発行の『広辞苑』（第七版第一刷）では、「にほん・が【日本画】 明治以後にヨーロッパから入った西洋画に対し、日本在来の技法・様式に基づいて明治時代に創出された絵画を指す語。墨や岩絵具を主として、若干の有機色料を併せ用い、絹・紙などの上に毛筆で描く」²⁰⁾と記されるに至ったことが容易に想像できる。なお、『広辞苑』（第四版第一刷）は1991年11月15日発行、『ブリタニカ国際大百科事典』（第2版改訂）の発行は

1993年3月1日、『世界大百科事典』（改訂新版）の発行は2007年9月1日、『新訂 マイペディア小百科事典』（初版第1刷）の発行は1994年10月25日であり、近代日本画研究の進展による日本画の捉え直しがされる以前の発行である。

したがって、本論においても、明治期以降に新たに生み出された日本絵画の様式である絵画が日本画であるという定義の下、明治期の日本画形成以前の日本の絵画及び現代までの日本の絵画の総称を「日本絵画」とし、日本画形成以降の近代日本画及び現代日本画を「日本画」とすることで、「日本絵画」と「日本画」を明確に区別し論じることとする。

3 中等教育（中学校及び高等学校）における日本画に関する学習の位置付け

初等教育及び中等教育での美術教育は、高等教育の造形性や創造性を研ぎ出す専門教育ではなく、美術における表現及び鑑賞に関わる学習活動を通して子供の人間形成を図ることを目標に行う全人教育としての普通教育である。当然ながら、初等教育での図画工作教育は中等教育での美術教育の基盤となり、中等教育での美術教育は高等教育の礎となる。初等教育と中等教育、そして中等教育と高等教育のそれぞれの間には関連性・連続性があり、後者には前者の教育の影響が少なからずある。この意味において、大学での日本画についての専門教育においても、中等教育での日本画に関する学習に対し全くの無頓着では居れない。本章では、高等教育につながる中等教育美術科において、日本画に関する学習指導をどのように位置付けているのかということについて、文部科学省「学習指導要領解説」における学習指導の要領から考察する。また、中学校美術「美術1」、「美術2・3」及び高等学校芸術「美術I」の文部科学省検定済教科書における掲載日本画図版に着目し調査することで、学生の日本画に対する意識や認識との関連性について考察する。

(1) 『中学校学習指導要領解説 美術編』及び『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編』における日本画に関する学習指導の位置付け

文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年告示）解説 美術編』では、「2 美術科改訂の趣旨」の「(i) 改善の基本方針」において、「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する」²¹⁾とし、「(ii) 改善の具体的事項」の「(エ)」では、「我が国の美術についての学習を重視し、美術文化の継承と創造への関心を高める。また、諸外国も含めた美術文化や表現の特質などについての関心や理解、作品の見方を深める鑑賞の指導が一層充実して行われるようにする」²²⁾としている。また、「美術科改訂の要点」の「(2) 内容の改善」の「イ 鑑賞領域の改善」では、「我が国の美術についての学習を重視し、第1学年に『美術文化に対する関心を高める』学習を新たに示し、3年間で系統的に美術文化に関する学習の充実が図られるようにする」²³⁾としている。さらに、中学校美術科で育成する感性に関して、「……感性はその時代、国や地域などに見られる美意識や価値観、文化などの影響を受けながら育成されることから、特に鑑賞では、作品や文化遺産などから、そのよさや美しさ、作者の心情やそれらを大切に守ってきた人々の気持ちや生き方、感謝や畏敬の念及び様々な国や人々が共通にもっている美に対するあこがれなどを感じ取ったり理解したりする学習を積み重ねることが大切である」²⁴⁾とし、「これからの国際社会で活躍する日本人を育成するためには、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、その

よさを継承・発展させるための教育や、異なる文化や歴史に敬意を払い、人々と共存してよりよい社会を形成していこうとするための教育を充実する必要がある。改正教育基本法において、教育の目標に伝統と文化を尊重する態度を養うことが新たに規定され、……（美術においては、鑑賞により）その国や時代に生きた人々の美意識や創造的な精神などを直接感じ取ることができる。それらを踏まえて現代の美術や文化をとらえることにより、文化の継承と創造の重要性を理解するとともに、美術を通じた国際理解にもつながることになる。以上のことから、美術科は文化に関する学習において中核をなす教科の一つであるといえる²⁵⁾とし、鑑賞活動を中心に過去から現代までの美術文化を捉えた日本美術の学習指導を重視している。当然ながら、近代及び現代の日本絵画の一分野である日本画についても、日本美術の学習指導において重視すべき学習内容であると言えよう。

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成21年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸書道）編 音楽編 美術編』においても『中学校学習指導要領（平成20年告示）解説 美術編』と同様に、「第1章総説」「第1節 改訂の趣旨」での「2 芸術科改訂の趣旨」「(ii) 改善の具体的事項（高等学校：芸術（美術，工芸））」「a 芸術（美術）」「(ア)」において、「『美術Ⅰ』においては、芸術としての美術への関心や理解を高めるとともに、我が国の美術や文化についての学習を重視し、美術文化に関する鑑賞が充実して行われるようにする。また、鑑賞に充てる授業時数を十分確保するようにする。』²⁶⁾、「3 芸術科改訂の要点」では「……我が国の美術文化，工芸や書の伝統と文化に関する鑑賞指導を充実したりするなど，我が国の伝統的な芸術文化の取扱いを一層重視した²⁷⁾」としている。そして、「第2章 各科目」「第4節 美術Ⅰ」「2 目標」「B鑑賞」においても、「……我が国の伝統的な美術の表現の特質や様式，主題や表現方法，日本及び諸外国の美術文化について理解を深めること……」²⁸⁾を指導事項としている。

さらに、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編』においても、平成20年の改訂で示された学習指導内容を引き継ぎ、「第1節 美術科の目標」「1 教科の目標」「(1) 教科の目標について」の「教科の目標(2)」において、「美術においては、古くからの美術作品や生活の中の様々な用具や造形などが具体的な形として残されており、受け継がれてきたものを鑑賞することにより、その国や時代に生きた人々の美意識や創造的な精神などを直接感じ取ることができる。それらを踏まえて現代の美術や文化を捉えることにより、文化の継承と創造の重要性を理解するとともに、美術を通じた国際理解にもつながることになる」²⁹⁾としている。また、文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』においても同様に、「第1部 第2章 各科目」「第4節 美術Ⅰ」の「B鑑賞」「1 鑑賞」「(イ)」において、「指導に当たっては、文化遺産などを特定の時代や地域のみ限定された独立したものとして捉えるのではなく、過去から現在に続く大きな歴史の視点から捉え、伝統的価値観が、現代の生活にも息づいていることに気付かせることが重要である」³⁰⁾とした。

つまり、中学校美術及び高等学校芸術「美術Ⅰ」の授業では、鑑賞活動を中心に日本の美術文化や表現上の特徴（特質）などについての学習を一層充実させることを、改訂での重要な改善点として学習指導するよう規定された。この改訂を受け、日本の美術文化である日本絵画の学習指導についても、「日本絵画の伝統的価値観に気付くこと」及び「日本絵画を伝統の日本絵画から現代日本画及び現代洋画（西洋画）につながる歴史の視点から

捉えること」という視点での学習指導が一層求められることとなったと言えよう。当然、日本画についても、日本画形成以前の伝統的な日本絵画とともに、近代及び現代の日本絵画の一分野として、一層充実した学習指導が求められたと言えるだろう。

(2) 中学校美術及び高等学校芸術「美術Ⅰ」における文部科学省検定済教科書図版にみる日本画に関する学習の位置付け

中学校美術及び高等学校芸術「美術Ⅰ」の文部科学省検定済教科書について、日本画に関する学習の位置付けを考察するため、大和絵や浮世絵など日本画形成以前の日本絵画の掲載図版数と、日本画の掲載図版数について調査を行った。その調査結果を次ページ「**表1 中学校美術及び高等学校芸術「美術Ⅰ」の文部科学省検定済教科書における明治期日本画形成以前の日本絵画と日本画掲載図版数**」に示す。なお、中学校美術の文部科学省検定済教科書（以降、「教科書」と略して記載する）は3社の出版社から10種類³¹⁾が発行されており、高等学校「美術Ⅰ」の教科書は2社から3種類³²⁾の発行である。

表1での**中学校一年使用の教科書**は4種類であるが、いずれの教科書とも日本画図版が少なく、日本画形成以前の日本絵画に関する図版数も、『**美術1**』**38 光村 美術 727**の7図版掲載の教科書を除いても数少ないことが分かる。これらの図版数では教科書を参考に、日本絵画の学習指導で求められる「日本絵画の伝統的価値観に気付くこと」はおろか「日本絵画を伝統の日本絵画から現代日本画及び現代洋画（西洋画）につながる歴史の視点から捉えること」を十分に指導することは容易ではない。また、**中学校二年・三年使用の教科書**においては、日本画形成以前の日本絵画に関する16図版を掲載する教科書が2種類あること、そして、日本画に関する5図版（『**美術2・3**』**38 光村 美術 827**の図版：小野竹喬《奥の細道句抄絵 田一枚植ゑて立ち去る柳かな》1976年、東山魁夷《道》1950年、高山辰雄《由布の里道》1998年、横山大観《洛中洛外雨十題 宇治川雷雨》1919年、篠田桃紅《久方の》1999年）、及び4図版（『**美術2・3**』**9 開隆堂・美術 826**の図版：横山大観《群青富士》1917年～1918年頃、片岡球子《山 富士山》1964年、東山魁夷《道》1950年、菱田春草《黒き猫》1910年）を掲載している教科書があり、年次が上がるにつれ日本絵画についての学習を促す意図が教科書掲載図版数から感じ取れる。しかし、日本画に関する図版数は総じて少なく中学校1年生使用の教科書と同様の実態に近い。こうした中学校美術の教科書における日本画掲載図版数の少なさは、日本画に関する5図版及び4図版を掲載した上記2種類の教科書を除いて、日本画に対する知識や認識、美的な感受を美術の授業で得ることなく、子供たちは義務教育を終えることを意味している。

表1の**高等学校芸術 美術Ⅰ**においては、日本画に関する12図版（『**高校生の美術1**』**116 日文・美Ⅰ 305**の図版：田中一村《アダンの海辺》1969年、中島千波《ひなげし》1995年、柴田是真《千種之間天井綴織下図》1886年、奥村土牛《醜翻》1972年、小野竹喬《瀬戸の海》1976年頃、茂本ヒデキチ《F 1 オリジナルラフ墨絵》2010年、譚小勇《走る豹》2005年、秋野不矩《廻廊》1984年、東山魁夷《年暮る》1968年、小倉遊亀《チューリップ》1949年、小畑薫《白い百合》2014年、加山又造《千羽鶴》1970年、福田平八郎《新雪》1948年）の比較的新しい現代日本画を含めた図版を掲載する教科書がある。この教科書には、日本画形成以前の日本絵画25図版も併せて掲載されており、高等学校において美術を選択し学ぶ子供たちに日本画を含む日本絵画に関する学習を促そうとする強い

意図を感じることができる。他の2種類の教科書においても同様に、掲載図版数は少ないものの日本画に関する4図版（『高校美術1』116 日文・美 I 302の図版：奥村土牛《泰山木》1958年、山口華楊《青蓮院の老木》1973年、小倉遊亀《画人像》1962年、小倉遊亀《兄妹》1964年）、4図版（『美術1』38 光村 美 I 304の図版：田中一村《初夏の海に赤翡翠》1962年頃、森田りえ子《春朧朧》1992年、中島千波《あさがお》2005年、田中一村《ずしの花》1955年）を掲載し、日本画形成以前の日本絵画の図版と合わせ、バランスよく伝統の日本絵画から現代日本画に至る流れを学習できるよう意図して編集されたであろうことが読み取れる。

中学校美術及び高等学校芸術「美術 I」の教科書を日本画掲載図版数という視点で捉えると、学習する年次が上がるに比例し日本画を含む日本絵画についての理解を深めていこうとする教科書編集上の意図は感じられるものの、「日本絵画の伝統的価値観に気付くこと」及び「伝統の日本絵画から現代日本画に続く歴史の視点から捉えること」という学習指導を行っていくために、中学校美術では日本画を含む日本絵画に関する学習の位置付けが少しでもある教科書を選択する必要があるだろう。また、高等学校での必修科目である芸術 I では、それぞれの高等学校において「音楽 I」、「美術 I」、「書道 I」の3科目の中から1科目を選択し履修することが多い。高等学校で「美術 I」を選択履修しない子供にとっては、中学校美術が学校の美術の授業において、日本画を含む日本絵画の表現上の特

表1 中学校美術及び高等学校芸術「美術 I」の文部科学省検定済教科書における明治期日本画形成以前の日本絵画と日本画掲載図版数

使用年次等	教科書名	教科書記号・番号	明治期日本画形成以前の日本絵画図版数	日本画図版数
中学校 一年	美術1 美術との出会い	116 日文 美術 724	3	0
	美術1 出会いと広がり	116 日文 美術 728	0	3
	美術1	38 光村 美術 727	7	1
	美術1	9 開隆堂 美術 726	2	1
中学校 二年・三年	美術2・3 上 生活の中に生きる美術	116 日文 美術 824	4	3
	美術2・3 下 社会に広がる美術	116 日文 美術 825	1	0
	美術2・3 上 学びの深まり	116 日文 美術 828	1 6	2
	美術2・3 下 美の探求	116 日文 美術 829	0	1
	美術2・3	38 光村 美術 827	6	5
	美術2・3	9 開隆堂 美術 826	1 6	4
高等学校 美術 I	高校美術1	116 日文 美 I 302	5	4
	高校生の美術1	116 日文 美 I 305	2 5	1 2
	美術1	38 光村 美 I 304	4	4

徴（特質）について学び、日本画から美的な感受を得ることができる最後の機会になる。このことを考慮に入れると、いささか物足りなさを感じざるを得ない。

4 高校生及び大学生の日本画に関する意識と認識、学習活動経験について

日本画と洋画（西洋画）という、近代及び現代の日本絵画を二分してきた絵画作品の区別という視点から、日本画に対する意識や認識、小学校図画工作科及び中等教育美術科での日本画に関する学習活動の実態を明らかにすることで、中等教育美術科及び高等教育での日本画分野における絵画指導上の課題を明確化できるのではないかと仮定し、高校生と大学生を対象に次ページ「表2 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査項目」に示す項目でのアンケート調査を実施した。

2019年7月中旬～同年7月下旬及び2020年6月～同年8月上旬（絵画に関する前期授業での日本画実技演習終了時）にアンケート調査を実施し、筆者が勤務する短期大学美術科で美術やデザインを専門的に学ぶ学生101名（内訳…短期大学1年次生：78名〔内26名：2020年調査〕、2年次生：17名、短期大学専攻科1年次生：2名、専攻科2年次生：4名）から回答を得た。また、東海地区の高等学校（回答を得た4校の内訳…全日制普通科の高等学校：1校、全日制普通科・理数科の高等学校：1校、全日制総合学科の高等学校：1校、全日制専門学科の高等学校：1校）に協力をいただき、2019年8月下旬から同年10月中旬（高等学校では、2学期始めの授業時、若しくは後期始めの授業時）に調査を実施し、高等学校で美術やデザインに関する科目を現在選択し学んでいる高校生427名（内訳…高等学校1年次生：359名、高等学校2年次生：40名、高等学校3年次生：28名）から回答を得た。本調査の結果を、「表3 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果【その1】」、及び「表4 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果【その2】」に示す。

(1) 高校生及び大学生の日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査項目設定に関して

アンケート調査の実施にあたっては、日本画に対する意識や認識と小学校図画工作科及び中等教育美術科での日本画に関する学習活動の実態を明らかにするため、表2に示す調査項目を設定した。調査項目の意識と認識の区別については、前論で確認したとおり、「意識とは、物事や状態に気づいていること、又は対象をそれとして気にかけること」をいい、「認識とは、物事の本質や意味を理解・識別し十分意識すること」をいう。

したがって、表2の調査項目1①は、日本画と洋画（西洋画）の区別が認識可能となった時期を問う認識調査項目として設定した。また、表2の1②は、日本絵画の一分野である「日本画」という名称を知り意識するに至った図画工作及び美術の授業での学習時期を調べる意識調査項目として設定し、日本画に関する学習活動の時期（日本画の名称、鑑賞活動及び表現活動の経験時期）の記憶について問う項目（表2の1②、2①：学習時期選択部分、2②：学習時期選択部分）を意識調査項目として設定した。加えて、日本画に関する鑑賞活動と表現活動の学習経験について、どのような学習内容や領域を日本画に関する学習活動と認識しているかという項目（表2の2①：自由記載部分、2②：自由記載部分）を、認識調査項目として設定した。表2の3では、自由記述により、高等学校までの

表3 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果【その1】

高校生及び大学生の日本画に関する意識と認識 学習活動経験についてのアンケート調査結果【その1】										
1. 「日本画」と「洋画（西洋画）」についての認識、意識										
①「日本画」と「洋画（西洋画）」の区別（認識）										
	高校 1年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 2年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 3年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校生 合計 (実数)	高校生 内割合 (%)	大学生 (実数)	大学生 内割合 (%)
小学生時から区別できた	103	28.7	7	17.5	4	14.3	114	26.7	14	13.9
中学生時から区別できた	153	42.6	13	32.5	12	42.9	178	41.7	30	29.7
高校生時から区別できた	27	7.5	10	25.0	9	32.1	46	10.8	44	43.6
大学生になり区別できた	—	—	—	—	—	—	—	—	11	10.9
区別することができない	70	19.5	10	25.0	3	10.7	83	19.4	2	2.0
その他	6	1.7	0	0	0	0	6	1.4	0	0
合計	359	100	40	100	28	100	427	100	101	100
②「日本画」という絵画分野及び名称についての学習活動の経験（意識）										
	高校 1年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 2年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 3年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校生 合計 (実数)	高校生 内割合 (%)	大学生 (実数)	大学生 内割合 (%)
小学校「図画工作」で学習	61	17.0	8	20.0	1	3.6	70	16.4	14	13.9
中学校「美術」で学習	168	46.8	17	42.5	15	53.6	200	46.8	41	40.6
高等学校「美術」で学習	10	2.8	3	7.5	6	21.4	19	4.5	29	28.7
大学生になり授業で学習	—	—	—	—	—	—	—	—	6	5.9
「日本画」の知識はあるが学習経験の記憶なし	83	23.1	10	25.0	4	14.3	97	22.7	6	5.9
学習の記憶なし・学習経験なし	36	10.0	1	2.5	2	7.1	39	9.1	0	0
その他	1	0.3	1	2.5	0	0	2	0.5	5	5.0
合計	359	100	40	100	28	100	427	100	101	100
2. 「日本画」に関する小学校図画工作科及び中学校美術科、高等学校芸術科美術での鑑賞・表現活動の経験										
①学校の授業（図画工作、美術）での「日本画」に関する鑑賞活動の経験（意識）										
	高校 1年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 2年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 3年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校生 合計 (実数)	高校生 内割合 (%)	大学生 (実数)	大学生 内割合 (%)
小学校「図画工作」で鑑賞	23	6.4	1	2.5	1	3.6	25	5.9	5	5.0
中学校「美術」で鑑賞	113	31.5	12	30.0	7	25.0	132	30.9	24	23.8
高等学校「美術」で鑑賞	4	1.1	5	12.5	2	7.1	11	2.6	36	35.6
大学生になり鑑賞	—	—	—	—	—	—	—	—	10	9.9
鑑賞の記憶なし、鑑賞活動をしていない	219	61.0	22	55.0	18	64.3	259	60.6	25	24.8
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.0
合計	359	100	40	100	28	100	427	100	101	100
②学校の授業（図画工作、美術）での「日本画」に関する表現活動の経験（意識）										
	高校 1年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 2年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 3年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校生 合計 (実数)	高校生 内割合 (%)	大学生 (実数)	大学生 内割合 (%)
小学校「図画工作」で表現	21	5.8	1	2.5	0	0	22	5.2	0	0
中学校「美術」で表現	42	11.7	6	15.0	1	3.6	49	11.5	9	8.9
高等学校「美術」で表現	1	0.3	5	12.5	4	14.3	10	2.4	24	23.8
大学生になり表現	—	—	—	—	—	—	—	—	68	67.3
表現の経験なし、活動をしていない	295	82.2	27	67.5	23	82.1	345	80.8	0	0
その他	0	0	1	2.5	0	0	1	0.2	0	0
合計	359	100	40	100	28	100	427	100	101	100

(2) 高校生及び大学生の日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果及び分析による考察

高等学校においては、美術やデザインに関する科目を選択している高校生427名からアンケート調査の回答を得たが、調査に協力いただいたいずれの学校でも高等学校1年次生(359名)は「音楽Ⅰ」、「美術Ⅰ」、「書道Ⅰ」の3科目の中から「美術Ⅰ」を選択している。また、高等学校2年次生(40名)、高等学校3年次生(28名)と年次が上がるにつれ本アンケートへの回答数が減少しているが、高等学校2・3年次では美術やデザインに関する科目選択が子供の進路希望や興味・関心に合わせた選択制であり選択者そのものの人数が少人数であるため、おのずと回答数も限られた数となっている。

次に、各調査項目における調査結果及び分析について論じることとする。

前々ページ「表2 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査項目」での調査項目1①の結果が、前ページ「表3 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果【その1】」の1①である。高等学校1年次生から高等学校3年次生までの全ての年次において、日本絵画である日本画と洋画(西洋画)を区別した時期、つまり、日本画及び洋画(西洋画)の表現上の特徴(特質)や違いに関して認識した時期を、「中学生時から区別できた」と回答した高校生が最も多く、高校1年:153人(学年内割合42.6%)、高校2年:13人(学年内割合32.5%)、高校3年:12人(学年内割合42.9%)であり、高校生全体:178人(高校生内割合41.7%)の結果から、高校生の41.7%の子供たちが中学生時から日本画及び洋画(西洋画)の表現上の特徴やその違いについて認識したことが分かる。この「中学生時から区別できた」に「小学生時から区別できた」とした回答数を加えると、高校1年:256人(学年内割合71.3%)、高校2年:20人(学年内割合50.0%)、高校3年:16人(学年内割合57.2%)であり、高校生全体:292人(高校生内割合68.4%)であった。つまり、高校生の68.4%が中学校の義務教育終了時までには日本画と洋画(西洋画)の区別をすることが可能になったという回答結果であった。また、「高校生時から区別できた」と回答した10.8%をこれに加えた79.2%の高校生が、日本画と洋画(西洋画)を区別することができるという結果となり、小学校図画工作及び中学校美術、高等学校芸術「美術Ⅰ」の授業での学習成果であると言えよう。そして、日本画及び洋画(西洋画)の表現上の特徴(特質)や違いに関する認識時期について、高等学校1年次生の「高校生時」との回答数:27人(学年内割合7.5%)であることに對し、高等学校2・3年次及び大学生の「高校生時」との回答数:高校2年:10人(学年内割合25.0%)、高校3年:9人(学年内割合32.1%)、大学生:44人(大学生内割合43.6%)であった。この結果は、高等学校1年次生にとっては高等学校入学後約5ヶ月経過の時点での調査であり、十分に高等学校芸術「美術Ⅰ」での学習活動が深まっていないという結果であろう。高等学校2・3年次生及び大学生では、日本画と洋画(西洋画)の表現上の特徴(特質)や違いについての認識が、年次が上がることによる美術に関する学習活動の深まりに比例し、次第に変化していくことを指し示しているのではないと思われる。一方、「区別することができない」とした高校1年:70人(学年内割合19.5%)、高校2年:10人(学年内割合25.0%)、高校3年:3人(学年内割合10.7%)、高校生全体:83人(高校生内割合19.4%)と、高等学校で美術を選択している高校生の19.4%にのぼることから、中学校美術や高等学校芸術「美術Ⅰ」の授業では日本画及び洋画(西洋

画)の表現上の特徴(特質)や違いについての認識を全ての子供たちに持たせるに至る学習活動が十分にできているとは言い切れない実態がある。なお、表3の1①カ その他:1人の選択理由は、「少しだけ区別できる」であった。

表2調査項目1②の結果が、表3の1②である。この調査項目1②は、図画工作や美術の授業において日本画に関する学習活動経験の有無と学習時期を調べる項目である。日本画という名称を知る(意識する)に至った学習の時期は、「中学生時『美術』で学習」の回答がすべての年次で最も多く、高校1年:168人(学年内割合46.8%)、高校2年:17人(学年内割合42.5%)、高校3年:15人(学年内割合53.6%)、大学生:41人(大学生内割合40.6%)であった。また、高等学校3年次生と大学生については、「高校生時」の回答も比較的多く、高校3年:6人(学年内割合21.4%)、大学生:29人(大学生内割合28.7%)であった。この結果は、調査項目1と同様に、高等学校での学習の深まりが日本画に対する意識の高まりにつながっているものと思われる。一方で、『日本画』の知識はあるが学習経験の記憶なし、つまり「日本画を知っている(意識はある)が、小学校図画工作科及び中学校美術科での日本画に関する学習活動の記憶がない」とした回答が、高校1年:83人(学年内割合23.1%)、高校2年:10人(学年内割合25.0%)と、およそ4人に1人の割合にのぼることが分かった。なお、表3の1②キ その他:8人の選択理由は、「保育園、高校の学校説明会で知った、大学受験の時知った、テレビやネットで知った、美術品の種類名で知った、祖母から教えてもらった、祖父が描いていた、母が日本画を習い始めて知った」であった。

表2調査項目2①の結果(自由記述の部分を除く)が、表3の2①である。この調査項目2①は、初等教育図画工作科(小学校)及び中等教育美術科(中学校、高等学校)の授業での日本画に関する鑑賞活動の有無意識と学習時期を調べる項目である。高校生については「鑑賞の記憶なし、鑑賞活動をしていない」とした回答がいずれの年次においても最も多く、高校1年:219人(学年内割合61.0%)、高校2年:22人(学年内割合55.0%)、高校3年:18人(学年内割合64.3%)、高校生合計:259人(高校生内割合60.6%)であった。この結果が意味するところは、中等教育美術科の授業では日本画に関する鑑賞活動が行われていない、もしくは子供たちの記憶や意識に残る鑑賞活動までには至っていないということである。反面、日本画に関する鑑賞活動経験の記憶の多くは、「中学校『美術』で鑑賞」との回答であり、高校1年:113人(学年内割合31.5%)、高校2年:12人(学年内割合30.0%)、高校3年:7人(学年内割合25.0%)、高校生合計:132人(高校生内割合30.9%)と高校生の30.9%を占め、授業での学習効果と中等教育における美術教育の意義について考えさせられる結果であった。なお、本項目については複数回答可としたが、複数回答は皆無であった。また、表3の2①アで記憶している学習内容には19人の記述があり、その主な記述は「版画:5人、浮世絵:3人、教科書に載っていた:3人、絵巻物の鑑賞:2人、墨で絵手紙を描いた:2人、ビデオをみて学習した、祖母が美術館に連れて行ってくれた、鳥獣戯画の鑑賞、富嶽三十六景の鑑賞…等」であり、多くの子供が日本画を日本画形成以前の日本絵画として認識しているという結果であった。表3の2①イで記憶している学習内容には100人の記述があり、その主な記述は「教科書の絵の鑑賞:20人、日本画をみて感想を書いた:9人、浮世絵の鑑賞:9人、テストで作品をみた感想を書いた:5人、水墨画の鑑賞:5人、鳥獣戯画の鑑賞:5人、葛飾北斎:9人、伊藤若

沖：5人，富嶽三十六景：4人，東海道五十三次：3人，水墨画：3人，模写：3人，歌川広重：2人，尾形光琳・琳派：2人，葛飾北斎：2人，屏風：2人，先生の日本画作品：2人，俵屋宗達，狩野永徳，ゴッホの絵に日本の絵が描かれていた，絵巻物の鑑賞，見返り美人図，作者や技法の鑑賞，日本の伝統模様，日本画と洋画の違いについての学習，版画の授業時の鑑賞，様々な日本画家の花の絵の鑑賞…等」であった。**表3の2①ウ**で記憶している学習内容には39人の記述があり，その主な記述は「伊藤若冲や東山魁夷などの展覧会鑑賞20，美術史学習4，教科書3，授業や展覧会での鑑賞2，琳派2，水墨画2，現存作家の日本画，自分で調べた，展覧会での講評会，浮世絵体験，美術講演会，屏風…等」であった。**表3の2①エ**で記憶している学習内容には11人の記述があり，その記述は「美術館：6人，授業：5人」であった。**表3の2①カ その他**：4人の選択理由は，「分からない：3人，本かテレビ：1人」であった。

表2調査項目**2②**の結果（自由記述の部分を除く）が，**表3の2②**である。この調査項目**2②**は，初等教育図画工作科（小学校）及び中等教育美術科（中学校，高等学校）の授業での日本画に関する表現活動の有無意識と学習時期を調べる項目である。高校生については「**表現の経験なし，表現活動をしていない**」とした回答がいずれの年次においても最も多く，高校1年：295人（学年内割合82.2%），高校2年：27人（学年内割合67.5%），高校3年：23人（学年内割合82.1%），高校生合計：345人（高校生内割合80.8%）であった。同一項目での調査において，大学生では，「**高等学校『美術』で表現**」との回答が大学生：24人（大学生内割合23.8%）と比較的多く，美術・デザインを専門的に大学で学ぶ学生の中には美術やデザインに関する専門学科やコースがある高等学校での学びの中で日本画についての表現活動を経験してきた学生が一定数在籍し，この結果となったと思われる。しかしながら，美術やデザインを専門的に学ぶ大学生についても，大学での筆者の授業で日本画表現活動に初めて取り組んだという学生の回答（「**大学生になり表現**」との回答）が，大学生：68人（大学生内割合67.3%）であり，67.3%の学生にとって大学での授業が日本画に関する表現活動の初めての経験であるということを示す結果となった。つまり，80.8%の高校生が，また美術やデザインを専門的に学ぶ67.3%の学生が，日本画に関する表現活動の経験がないという結果であった。これが意味するところは，中等教育美術科の授業では日本画に関する表現活動を行っていない，もしくは子供たちの記憶や印象・意識に残る表現活動までには至っていないということである。学校の授業（図画工作，美術の授業）において，日本画に関する表現活動をするにあたっては，日本画の画材の取り扱いについてある程度の知識や教材研究を含めた事前準備が必要であるということも，子供たちに日本画に関する表現活動の機会を提供できていないという調査結果に至った一要因であろう。なお，本項目についても複数回答可としたが，複数回答は皆無であった。また，**表3の2②ア**で記憶している学習内容には26人の記述があり，その主な記述は「版画：17人，墨で水墨画を描いた：5人，浮世絵の模写や版画制作：3人，日本画を模写した」であり，その多くの子供が日本画を日本画形成以前の日本絵画として認識しているという結果であった。**表3の2②イ**で記憶している学習内容には49人の記述があり，その主な記述は「墨で描いた・水墨画：35人，水干絵具：6人，教科書から選んで模写した：3人，版画：2人，教科書に載っていた，浮世絵の模写…等」であり，この調査項目においても多くの子供が日本画を日本画形成以前の日本絵画として捉えているという結果であっ

た。表2の2②ウで記憶している学習内容には1人の記述「静物を日本画で描いた」、また、表3の2②エで記憶している学習内容には9人の記述「大学の授業：9人」があった。

表2調査項目3の結果が、次ページ「表4 日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果【その2】」である。表2調査項目3は、日本画についてのどのように捉えているかということ的自由記述により回答する、高等学校までの日本画についての認識についての調査項目である。この項目での自由記述での回答結果を表4のア：「昔の日本の絵（浮世絵等）」に類する認識からの記述例、イ：「日本の風景・風物を描いた絵（富士山等）」に類する認識からの記述例、ウ：「色や形などの特徴・印象（和風等）」に類する認識からの記述例、エ：「水墨画（墨で描いた絵等）」に類する認識からの記述例、オ：「特別な絵具や材料（岩絵具等）」に類する認識からの記述例、カ：「その他」の記述例、キ：「分からない」に大きく分類し、「無回答」を加え回答件数を集計した。分類した表4のアとエの回答は、本論で論じてきた日本画の定義から言えば日本画ではなく日本画形成以前の日本絵画に該当する。高校生合計：ア65人＋エ48人＝113人（高校生内割合ア15.2%＋エ11.3%＝26.5%）及び大学生：ア30人＋エ5人＝35人（大学生内割合ア29.7%＋エ4.9%＝34.6%）、つまり高校生の26.5%以上、大学生の34.6%以上の子供が、「日本画形成以前の日本絵画が日本画である」というイメージが子供たちの意識の中に強くあり、定義からして日本画と呼べない近世までの日本絵画を日本画として認識しているという結果であった。また、表3のイやウ、オに分類した記述の中にも「和風で江戸時代の人々の暮らしが描かれた絵」など、明らかに日本画形成以前の日本絵画をイメージし回答したと思われる記述内容が多く含まれる。さらに、表4のキ：「分からない」や「無回答」も合わせると、今日定義されている日本画に関する正しい認識を得られていない子供がかなりの割合で存在すると思われる。

(3) 高校生及び大学生の日本画に関する意識と認識、学習活動経験についてのアンケート調査結果及び分析による考察のまとめ

表2調査項目2①及び2②では、高校生の79.2%が日本画と洋画（西洋画）の区別ができるという回答結果であったが、表3の2①、表3の2②、表4における「日本画」に関する意識と認識、及び小学校図画工作、中学校美術、高等学校芸術「美術Ⅰ」での表現・鑑賞活動の学習経験についての回答結果（高校生の26.5%以上、大学生の34.6%以上の子供が、今日の定義からして日本画と呼べない近世までの日本絵画を日本画として認識）から、日本画に関して正しい認識を得られていない子供たちがかなりの割合で存在し、明治期日本画形成以前の日本絵画を日本画として認識しているという実態がある。日本画に関して正しく認識するための表現・鑑賞活動の経験がないことによる結果として、日本画に対するイメージが学習経験のある日本画形成以前の日本絵画（大和絵や浮世絵、水墨画など）として脳裏に刻み込まれ、「日本画＝伝統の日本絵画（昔の日本の絵のイメージ）」として子供たちの自由記述での回答結果に多く現われたのであろう。

また、表2調査項目2①及び2②は、学校の授業（図画工作、美術）における日本画に関する学習活動経験の有無及び内容、学習時期の調査を含む項目であるが、小学校での図画工作や中学校、高等学校での美術の授業で日本画を学習する時間や機会は、鑑賞活動時や表現活動時の教科書掲載図版などでの鑑賞、美術館等での作品鑑賞などの場合であろう。

表4 日本画に関する意識と認識，学習活動経験についてのアンケート調査結果【その2】

高校生及び大学生の日本画に関する意識と認識 学習活動経験についてのアンケート調査結果【その2】										
3. 「日本画」についてのイメージや知識（認識）《自由記述による回答を基に分類》										
大学での「日本画」についての学習以前の「日本画」についてのイメージや知識（認識）										
ア 「昔の日本の絵（浮世絵等）」に類する認識からの記述例										
古い絵のイメージ，日本画といえば浮世絵，日本画＝浮世絵，日本画といえば浮世絵・版画です，日本画は江戸時代に描かれた絵，江戸時代の絵のイメージ，日本画といえば日本に昔からある和風・江戸時代のイメージ，浮世絵やふすま絵が日本画，浮世絵や絵巻物，歌川広重の絵，葛飾北斎など江戸時代の人が描いた浮世絵，富嶽三十六景，日本画は昭和の古いイメージ，見返り美人図，織田信長の時代に描かれた絵，昔の人が描いた絵，大和絵…等										
イ 「日本の風景・風物を描いた絵（富士山等）」に類する認識からの記述例										
富士山のイメージ，虎や大波や富士山が描かれている，日本画といえば赤富士の絵，日本画＝富士山や京都の街並み，お寺など日本の風景を描いた絵，日本の風物を描いた絵，花鳥風月を描いた絵，鯉，日本画といえば着物です，女性を描いた絵が多い，描かれた時代に流行したものが描かれている，日本人や日本の風景が描かれている…等										
ウ 「色や形などの特徴・印象（和風等）」に類する認識からの記述例										
風流なイメージで分かりやすい，細かいところまでしっかり描かれている，しぶい，地味，日本画は色が薄くリアリティがあまりない，淡い感じの表現，大胆で大きめに描く，きれいで繊細・平面的，平面的で色が鮮やか，色が単純で濁ったイメージ，平面的で線画，線描で描かれている，輪郭線がある絵，かたいイメージ，和風な感じ，筆を使って描いてある和風のイメージ，畳とかの和のイメージ，日本画は和風な絵，日本画は和についての絵が多い，和のイメージ，日本特有の和風の絵，昔描かれた和風な絵，和風で木や自然を描いた絵が多い，和風で江戸時代の人々の暮らしが描かれた絵，歌舞伎などと同じ和のイメージ，西洋画にくらべて，線や面をつかった大まかな感じ…等										
エ 「水墨画（墨で描いた絵等）」に類する認識からの記述例										
日本画は墨で描かれているイメージ，墨の絵，日本画＝雪舟，日本画＝水墨画，日本ならではの絵で墨が使われているのが特徴，墨などで和を醸し出している絵，水墨画で日本の風景などを描いてある，水墨画で自然を描いた絵が多い，墨の濃淡で描かれている，水彩画や水墨画のイメージ，墨で着物を着た女性の絵や富士山が描かれている…等										
オ 「特別な絵具や材料（岩絵具等）」に類する認識からの記述例										
岩絵具や墨で鮮やかに描くイメージ，日本画は和紙に描かれ古い時代から受け継がれてきたもの，墨など日本でつくられた材料で描かれている，岩絵具と屏風，高価，珍しい絵具を使う日本の絵，岩絵具を使う上品な絵，岩絵具を使って制作し全体的に落ちついた色づかい，色を塗るのが難しく技法が複雑，絵具に独特の風味がある…等										
カ 「その他」の記述例										
一言では説明できない，日本画と水彩画の区別をしていなかった，他国の人々が鑑賞するのに人気がある，決まりごとが多い，一度描き始めると修正できない，制作に時間がかかる，時代時代で感じが違う…等										
〔自由記述による回答を基に分類した件数〕										
	高校 1年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 2年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校 3年 (実数)	学年内 割合 (%)	高校生 合計 (実数)	高校生 内割合 (%)	大学生 (実数)	大学生 内割合 (%)
ア 昔の日本の絵 (浮世絵等)	54	15.1	7	17.5	4	14.3	65	15.2	30	29.7
イ 日本の風景・風物を描いた絵 (富士山等)	47	13.1	5	12.5	3	10.7	55	12.9	7	6.9
ウ 色や形などの特徴・印象 (和風等)	50	13.9	7	17.5	6	21.4	63	14.8	37	36.6
エ 水墨画(墨で描いた絵等)	35	9.7	5	12.5	8	28.6	48	11.3	5	4.9
オ 特別な絵具や材料 (岩絵具等)	3	0.8	6	15.0	1	3.6	10	2.3	3	3.0
カ その他	2	0.6	2	5.0	0	0	4	0.9	4	4.0
キ 分からない	14	3.9	1	2.5	0	0	15	3.5	1	1.0
無回答	154	42.9	7	17.5	6	21.4	167	39.1	14	13.9
合計	359	100	40	100	28	100	427	100	101	100

授業時に日本画作品を鑑賞する場合は、図画工作や美術の授業担当教員もしくは美術館学芸員からの発問や説明・解説があり、教科書図版においては説明・解説が掲載されている場合も多く、日本画の特徴（特質）や洋画（西洋画）との表現上の違いについて意識しながら見ることが多いと考えられる。反面、図画工作や美術の授業を学習指導する美術教師の日本画に関する認識が、子供たちの日本画についての意識や認識に多大に影響を及ぼすということも、注視しておかねばならない視点であろう。

5 まとめ：本研究における結論（成果及び課題）及び授業実践研究の必要性と方向性

本研究をとおして、次に挙げる5つの結論（成果及び課題）を得ることができた。

1. 高校生の79.2%が日本画と洋画（西洋画）の区別ができると認識している。
2. 高校生の60.6%は美術の授業で日本画に関する鑑賞活動の経験・記憶がない。
3. 高校生の80.8%は美術の授業で日本画に関する表現活動の経験・記憶がない。
4. 日本画に対する認識があると回答した高校生の26.5%以上は、明治期日本画形成以前の日本絵画を日本画として認識している。
5. 学生に、日本画を正しく認識するための学習（表現・鑑賞活動）が必要である。

これら結論として挙げたいいくつかの課題解消のためには、日本画の特徴（特質）について認識を深めるための授業実践研究が必要であると考え。絵画に対する認識は、絵画についての学習体験を積み重ねるほど深まっていくと言え、日本画についても同様である。日本画に対する認識は、日本画に関する表現活動と鑑賞活動での新たな発見や気付きによって、日本画に関する再認識を何度も繰り返しながら次第に深まっていくと言えよう。筆者には、日本画の表現上の特徴（特質）及び日本画形成の歴史（日本画史の概説）に関する学習活動を伴う日本画実技・演習授業を通して、学生や公開講座受講生の日本画に対する意識や認識が大きく変化したという実体験がある。この実感から、中等教育美術科における美術教育から高等教育につながる日本画分野における絵画指導上の一課題の解消が、日本絵画としての日本画の特徴（特質）について認識を深めるための、表現活動と鑑賞活動の一体的な絵画指導法・授業実践にあると仮定し研究を進めたい。この仮定を実証する実践研究については、次論以降に委ねることとする。

【謝辞】

本研究にあたり、「日本画に関する意識と認識についてのアンケート調査」にご協力をいただいた高等学校の生徒の皆様や関係者、そして、本学学生の皆様に感謝申し上げます。

【註】

- 1) 矢代幸雄、『日本美術の特質』（第四刷）、昭和29年、岩波書店 pp.3-4
- 2) 有田洋子、2016、「日本美術作品を学習する教科の考察－社会科で学ばれつつある美術－」、大学美術教育学会誌『美術教育学研究』、第48号（2016）、p.32
- 3) 永井学、2020、「中等教育及び高等教育における絵画指導についての一考察－絵画に対する学生の認識－」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』、第57巻、p.39
- 4) 『広辞苑』（第七版第一刷）、2018年、岩波書店 p.1620
- 5) 『世界大百科事典』（29 改訂新版）、2007年、平凡社 p.108
- 6) 『広辞苑』（第四版第一刷）、1991年、岩波書店 p.1962
- 7) 『ブリタニカ国際大百科事典』（4 第2版改訂）、1993年、ティビーエス・ブリタニカ p.1028

- 8) 前掲書, 『世界大百科事典』(21 改訂新版) p.405
- 9) 『新訂 マイペディア小百科事典』(初版第1刷), 1994年, 平凡社 p.1063
- 10) 『図解 日本画用語辞典』(初版第5刷), 2011年, 東京美術 p.8
- 11) 北澤憲昭, 『〈列島〉の絵画 - 「日本画」のレイト・スタイル』(初版第一刷), 2015年, ブリュッケ p.78
- 12) 前掲書, 『〈列島〉の絵画 - 「日本画」のレイト・スタイル』(初版第一刷) pp.146-147
- 13) 前掲書, 『〈列島〉の絵画 - 「日本画」のレイト・スタイル』(初版第一刷) pp.10-11
- 14) 北澤憲昭・杉田敦, 『芸術表象コンセプトブック アート・プラットフォーム』(初版), 2010年, 美学出版 pp.307-308
- 15) 古田亮, 『日本画とは何だったのか 近代日本画史論』(初版), 2018年, KADOKAWA pp.6-7
- 16) 前掲書, 『日本画とは何だったのか 近代日本画史論』(初版) p.16
- 17) 前掲書, 『日本画とは何だったのか 近代日本画史論』(初版) pp.375-376
- 18) 小野文子・間島秀徳, 2016, 「対西洋としての日本画の創出と再考」, 大学美術教育学会誌『美術教育学研究』, 第48号(2016), p.132
- 19) 中村二柄, 1978, 「絵画とデザイン」【講演要旨】 , 日本美術教育学会誌『美術教育』, 1978巻229号, p.6
- 20) 前掲書, 『広辞苑』(第七版第一刷) p.474
- 21) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 美術編』, 平成20年, 日本文教出版 p.4
- 22) 前掲書, 文部科学省『中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 美術編』 p.5
- 23) 前掲書, 文部科学省『中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 美術編』 p.6
- 24) 前掲書, 文部科学省『中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 美術編』 p.11
- 25) 前掲書, 文部科学省『中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 美術編』 pp.11-12
- 26) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成21年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』, 平成21年, 教育出版 p.4
- 27) 前掲書, 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成21年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』 p.6
- 28) 前掲書, 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成21年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』 p.55
- 29) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編』, 平成30年, 日本文教出版 pp.16-17
- 30) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』, 平成31年, 教育図書 p.131
- 31) 文部科学省検定済教科書(中学校美術)
 - 『美術1 美術との出会い』116 日文 美術 724, 平成26年, 日本文教出版
 - 『美術1 出会いと広がり』116 日文 美術 728, 平成31年, 日本文教出版
 - 『美術1』38 光村 美術 727, 平成31年, 光村図書出版
 - 『美術1』9 開隆堂・美術 726, 平成31年, 開隆堂出版
 - 『美術2・3上 生活の中に生きる美術』116 日文 美術 824, 平成26年, 日本文教出版
 - 『美術2・3下 社会に広がる美術』116 日文 美術 825, 平成26年, 日本文教出版
 - 『美術2・3上 学びの深まり』116 日文 美術 828, 平成31年, 日本文教出版
 - 『美術2・3下 美の探求』116 日文 美術 829, 平成31年, 日本文教出版
 - 『美術2・3』38 光村 美術 827, 平成31年, 光村図書出版
 - 『美術2・3』9 開隆堂・美術 826, 平成31年, 開隆堂出版
- 32) 文部科学省検定済教科書(高等学校芸術「美術I」)
 - 『高校美術1』116 日文・美 I 302, 平成31年, 日本文教出版
 - 『高校生の美術1』116 日文・美 I 305, 平成31年, 日本文教出版
 - 『美術1』38 光村 美 I 304, 平成31年, 光村図書出版